眠らない兵士

kurunau

眠らない兵士

もう、何日、シャワーを浴びていないだろう。

戦場に来て、早２週間が経とうとしていた。激戦区で一日中、銃を握り、撃っていた。身体に染み込んだ硝煙がきついが、きっと誰もシャワーを浴びようとする者はいないだろう。シャワーを浴びる時間があれば、皆、睡眠を取る。眠るときは必ず浅い睡眠だ。どこから敵が襲ってきても瞬時に覚醒し応戦できるように神経を張り巡らせた状態で眠りに着く。よって、戦闘での疲労は解消されるはずもなく、疲れたまま戦場へ向かう。

そんな時に『あれ』は届いた。軍医長から最初は「ただの栄養剤だ」と言われた瞬間、皆がその『栄養剤』の中身を察した。それは絶対に『栄養剤』ではないこと、そして『栄養剤』が皆の手に渡った時だれもその『栄養剤』を打とうとする者はいなかった。誰もが『人間で居られる事』を望んで居たからだ。だがその『栄養剤』を貰った日から地獄のような日が続いた。戦場に向かった部隊が帰ってこなかった。その次の部隊も、そのまた次の部隊も、帰ってくるのは弾丸などを運ぶ支援兵のみ、その理由は自然と分かった。『帰らない』のではなく『帰れない』のである。

私と彼は最後の部隊に編入した。リュックサックの中に余分にマガジンを投げ込み、それを背負うと片道切符の戦場行きトラックに乗り込んだ。彼はガムを噛みながら、私は銃を大切そうに抱き、荒れた道を進んだ。トラックで進むこと数十分、戦闘区の数キロ前にしてトラックは止まった。「これよりは徒歩で行く」と隊長は言った。徒歩で進むこと数時間、廃墟のような都市に到着する。淀んだ空は鳴り止まない銃撃音、きっとどこかで戦闘は続けられているのだろう。剥がれたアスファルトの上を、部隊は進んだ。私と彼は部隊の後方でゆっくりと進んでいた。そんな時だった。爆音が部隊の前方を包んだ。

オレンジ色の閃光と爆発の熱が私に襲い掛かり、転んだ。目の前に仲間だった頭や腕が弾け飛び、血が焦げる臭いが鼻に突き刺さった。私はすぐに起き上がると誰かが叫んだ。「向かいのビルに敵が居るぞ！」と、すぐに物陰に身を寄せた。そして、銃の安全装置を外し、コッキングし、照準を合わせ、引き金を引いた。今までと同じように、反動が私の肩を叩き、薬莢が舞った。数人、敵を撃ち殺すと、すぐに場所を変える。壊れた車に隠れる。数十分の戦闘後、私は部隊とはぐれ、激戦区でたった一人、ビルの屋上で敵を見張っていた。

不意に足音が聞こえた。腰からハンドガンを抜き、足音の方向へと銃口を向けた。銃口の向こうに居たのは彼だった。彼は敵ではないことを示すため両手を上げ、私のほうに近づいた。彼はすぐに銃を持つと、私とは反対側の方向を確認しに行った。時間が経ち、次第に暗くなるそんな中、私と彼は銃を側に置き、『それ』を取り出した。軍医長から渡された『栄養剤』だった。私は彼に「本気か？」と言うと「本気さ、これは生きるための術なんだ」と彼は答えた。彼は『栄養剤』を取り出し、完全に暗くなる前に、腕に打った。私も、生き残るため、それを打った。

『栄養剤』は凄まじい能力を発揮した。疲れず、眠れず、そしてなにも感じなかった。自分の感覚だけが暴走するような感覚ではあったが、気分の悪いものではなかった。だが『栄養剤』の能力は数日しか持たず、効果が切れると凄まじい疲労感と睡魔が襲った。それを抑制するために

再び『栄養剤』を打った。そして『栄養剤』が切れた頃になるとようやく、味方と合流、弾丸の補給と数日分の『栄養剤』を貰う。そうやって、私と彼は不眠不休で一ヶ月戦い続けた。時には真夜中に敵の陣地で、ナイフを駆使し、宿舎を襲った。時には地雷を仕掛け、吹き飛んだ敵を眺めた。

そうやって、私と彼は戦い続けた。２ヶ月後の時だった。彼は戦場のど真ん中で倒れた。私は急いで駆けつけ、物陰に彼を引きずりながら隠れた。撃たれた形跡はなかった。そして彼もなぜ倒れたのか分からなかった。痛みは無く、ただ動かないのだと言う。敵は目の前にまで迫っている。ここで立ち往生していれば待つのは死のみ。彼は言った「そろそろ限界なのかもな」私はそれが諦めの意味なのか、それともまた別の意味なのか知ることは、今は出来なかった。私は撃った。彼のために、グレネードを投げ込み、銃の引き金を引き続けた。しばらくの間、無我夢中に撃った。正確にそして確実に敵を殺せるようにひたすら撃ちまくった。そして味方の兵士が現れるころには、敵はすでに退却をはじめ、それと同時に私たちにも退却の命令が出た。

私がその命令に対して安堵の息を漏らした時だった。彼を担ごうと思い、視線を向けた。だが彼はすでに死んでいた。彼の手には煙を吐くハンドガン、彼は自ら死を選んだのだ。味方の兵士から「もうすぐ爆撃が始まる。早く退避するぞ」と叫んでいた。私は彼のドッグタグを外し、その場を後にした。安全区域に来た頃には爆撃が始まっていた。劣化ウラン弾によるその光の中に今でも彼はいる。そして私は今でも覚えている。彼のドッグタグを外すときの表情を…そしてその意味を知るのはずっと先のことだった。

私の身体に異変が起きたのは拠点キャンプに戻ってきたときだった。トラックから降りることが出来ず、顔から地面に突っ込んだ。他の兵士が慌てて私に「大丈夫か？」と聞いたが私にはその時の痛みはなかった。転んだということは覚えているが痛みはなかった。私は担架に乗せられ、治療室まで運ばれた。どうやら軍医長はすでに戦死したらしく、新しい軍医長が私の傷を診てくれた。診断結果がでた。歩けないのは「疲労骨折」だそうだ。両足と肩の骨が砕けていて、今まで歩けていることが奇跡に等しかったらしい。そして新しい軍医長から『栄養剤』の中身がなんなのかを教えてくれた。もうすでに分かっていることだった。私は骨折を治療するため、そのまま宿舎に残った。地獄のような日々だった。眠れず、疲れず、そして痛みがない。全てを拒絶された気分だった。『栄養剤』が切れたときに襲う、激しい疲労感も、凄まじい睡魔も襲ってこなかった。だからこそ恐怖感が私を襲った。

症状がようやく治まったころには戦争はすでに終わっていた。味方軍の全軍退却という敗北で、私は輸送機に乗せられ、軍の病院に治療を続けられた。数週間で症状も治まり、少し障害は残るものの、私は故郷に帰ることが出来た。だが本当の地獄はこれからだった。数年ぶりに故郷に戻ってきたとき歓迎してくれる人間は誰一人居なかった。私には…いや私たち軍には『勝ちもせず、ただ放射能を世界にばら撒いた』というレッテルを貼られたのだ。町の人間だけではない家族からも我が身を守るため、私と家族の縁を切り捨てられ、恋人にも拒絶された。そして、私は故郷で、自分が必死になって守ろうとしたこの故郷にある公園のベンチで私は眠った。

私はなんのために戦い、私はなんのためにこの愛しき故郷に戻ってきたのだろうか。全てに拒絶され、ようやく麻薬との戦いにも勝てたというのに、私はなんのために今日まで生き続けた

のだ。戦場で親友を失い、自分の身体を使い物にならなくなるまで必死に戦い続けたのに、私にはその功績なんぞ誰にも認められず、家族にも、恋人にも、人間に拒絶された私はどうやって生きればいいというのだ。私は、その体を引きずり、人気の無い場所に来ていた。そしてバックからハンドガンを取り出すと、弾丸を込めた。「なるほど確かにこれは限界だ」私はそう言ってハンドガンを頭に向け、引き金を引いた。

　薄れ行く意識の中、私は彼の死に際の表情を思い出した。笑ってた。すごく幸せそうに、彼は笑ってた「ようやく安心して眠れる」のだと、私はその意味が分かった瞬間、生まれて初めて安心して眠れることに感謝し、笑った。